

『幸いな人生』 (要旨)

聖書箇所: 詩篇 1:1~5

【1】 幸いな人とは誰か

詩篇1篇の作者は、幸いな人を「…悪しき者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、嘲る者の座に着かない人」(1:1) だと言います。この「歩まず」、「立たず」、そして「着かない」は、人の悪に染まっていく過程を描いているのでしょ。人は、悪しき者の広場にたむろしているうちに、悪事を行う者に同調し、やがて「世間知らずのヤツはわりを食うのだ」と嘲る者へ。

詩篇1篇の作者は悪しき者のはかりごとを歩んでいると気づいた者にはそこから離れるように、「今更仕方ない」と諦めている者には急いで逃げ出すように、促しているのでしょう。

次に「幸いな人」の積極面が語られています。

「幸いな人」とは「主の教えを喜びとし、昼も夜もその教えを口ずさむ人」だと言います。「主の教え」(トーラー)とは、神様の御思いが記された「おきて/律法」を指します。それを絶えず口ずさむ人が「幸いな人」だと言うのです。

私たちは「幸いな人」でありたいと願いながら、容易に「悪しき者のはかりごと」を歩みやすい性質を持っています。それゆえに詩篇1篇の作者は、悪から離れ、主の教えを口ずさむことが、「幸いな人」となる秘訣だと教えます。

【2】 幸いな人の日常生活

現代人は、文明の利器によって、多くの情報を「見る」機会が増えました。みことばを「読む」という時、私たちは目で追うことに留まっていられないでしょうか。今朝の詩篇一篇は「幸いな人」は主の教えを常に「口ずさむ」と教えます。この「口ずさむ」という言葉は、発音が不明瞭な音を指す言葉です。動物の場合、クークーという鳩の鳴き声、ライオンのうなり声等に使われます(イザヤ38:14, 31:4)。人の場合、呟く場面に使われる言葉です。他者に向かって明瞭に発声するのではないので、小声で「口ずさむ」あるいは「瞑想する」などと訳されます(参照:HALOT)。つまり、「主の教え」(2)を一度読んで理解するという意味ではなく、昼も夜も口ずさみ、みことばを自分のものにしていくことな

のです。E. ピーターソンは「みことばを昼も夜も咀嚼する人」(“The Message”)と意識します。

主の教えを口ずさみながら悪事を行うことは困難ですから、自ずと悪しき者のはかりごとから遠ざかることでしょう(参照:詩篇 119:11)。

そして「主の教え」を口ずさむことは、神様がどのようなお方であるか、また神様が私たち一人一人をどれほど大切に思っておられるのかを深く理解する助けになります。私たちは「神様が…」という視点を忘れる時に、自分の見える範囲の中で安易に評価するようになります。

神様がどのような視点で物事を見ておられるのか、立ち止まって思い巡らす時に、悪者のはかりごとにつられて不必要な争いに自ら首を突っ込むことから守られるのです。

【3】 幸いな人の歩みには重みがある

詩篇1篇の作者は、主の教えを喜びとする人は、流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結びその葉は枯れないと教えています(3)。

流れのほとりに植えられた木は、豊富な水と太陽によって栄養を受けます。水、土、太陽が木に栄養を与えるように、神様のみことばは私たちのたましいに栄養を与えます。

それに対して、悪しき者は「主の教え」にとどまることをせず、自分の目で見える範囲の中で「あっちの水は甘い、こっちの水が甘い」と行ったり来たりします。人の目には、いいとこ取りをしているように見えても、「風が吹き飛ばす籾殻」(4)のように実質が伴わず、時間が経っても実を結ぶことがないと詩篇1篇の作者は辛辣に評価します。

▷みことばが教える「幸いな人」は、主の教えを口ずさむ人です。それは神様が与えてくださる「幸い」を待ち望むということです。

新しい年、みことばを味わい、みことばに留まり、そしてみことばに励まされて歩むことができますように。

